

教師の言葉かけと自己肯定感の影響

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
156031 浅井良樹

教師の言葉かけと自己肯定感の影響

浅井良樹

生徒指導力高度化コース

要約：本論文は、「教師の肯定的な言葉かけが子どもの自己肯定感を有意に向上させるのではないか」を仮説とし、子どもの自己肯定感を高めることができる教師の有効的な言葉のかけ方を明らかにすることを目的とした研究である。調査協力者は中学生 149 名である。教師の言葉かけに関する質問紙調査を行い、自己肯定感得点、教師とのかかわり得点を算出し、教師にかけられた言葉を分類した。教師から肯定的な言葉かけをかけられた経験をもつ子どもは、自己肯定感が高く、教師とのかかわりが多い傾向にあることが明らかになった。また、教育相談や行事などの特別な場面ではなく、普段の学校生活でかけられた言葉のほうが子どもの印象に強く残っていることが分かった。子どもの自己肯定感を高める言葉かけを行う上で大切なことは、相手をしっかりとよく見て受け止め、飾らないことばでそのままに相手を褒め、ねぎらうことであると結論付けた。

キーワード：教師の言葉かけ、自己肯定感、中学生、教師とのかかわり、学校生活

第一章 はじめに

学校現場では「どうせできない」や「どうせ俺なんて」と、諦めてしまったり容易な方へと流れてしまったりする子どもをしばしば目にする。それも、挑戦してみても駄目だったから落ち込むというのではなく、挑戦する前から諦めてしまう子どもや、自らを非常に低く見積もってしまう子どもが多い。このような子どもを目にすると違和感を抱く。夢見がちであれとは言わないが、将来や自分自身を悲観せず、何事にも挑戦する子どもであってほしい。すぐに諦めてしまう子どもの背景には様々な要因が存在しているのだろうが、その一つに自己肯定感の低下があるのではないだろうか。内閣府は『平成 26 年度版子ども・若者白書』の中で、日本の若者は諸外国と比べて、自己を肯定的に捉えている者の割合が低く、自分に誇りを持っている者の割合も低いことを明らかにした(1)。さらに日本の若者は諸外国に比べて将来への希望があると感じている者の割合が最も低いこともまた明らかとした。諸富祥彦(2000)は、子どもの自己肯定感の著しい低下が、学校での荒れや暴力の増加につながったと述べている(2)。また、竹田レイ子ら(2004)は、自己肯定感が低い子どもは学校生活での不安が大きいことを明らかにした(3)。自己肯定感の低下は、子ど

ものの学校生活に様々な悪影響を及ぼすと言わざるをえない。さらに、自己肯定感が高いと学校適応感が高まり、進路（キャリア）成熟が高まることが明らかになっている(4)。日本の若者の自己肯定感の低さは喫緊の課題であり、将来への希望を促し充実した学校生活を送るためにも自己肯定感の向上は必要不可欠である。

教師の言葉かけについては、吉川正剛ら(2007)が学習意欲との関連を明らかにし、非意図的な教師の発言が子どもの学習意欲を低下させることもあり、言葉の意味を決めるのは受け手であるという認識を持って、教師は言葉かけを行わなければならないと述べた(5)。また、宮田一仁(2008)は、児童が教師の言葉かけを子どもが心に残った言葉として多く受け止めるほど、学習の自発性を高める効果があることを明らかにした(6)。学校は教科指導と生徒指導が両輪になって運営されていると言われる。教科指導と教師の言葉かけとの関連は明らかであるが生徒指導との関連はどうだろうか。西口利文(2007)は、問題場面において中学生は助言に類する言葉かけを求める傾向にあることを明らかにした(7)。安達紀子ら(2000)は、教師の言葉かけにおいて成功場面では賞賛の言葉かけが、失敗場面では安心感を与える言葉かけが有効であることを明らかにした(8)。生徒指導と教師の言葉かけの関連は明らかである。学校において教師の言葉かけが果たす役割は大きいといえる。教師の言葉かけと学習意欲の関連や、学校場面における教師の言葉かけについてはこれまでの研究で明らかであるが、教師の言葉かけがもたらす影響について述べられた研究は少ない。本論文では教師の言葉かけの影響、特に自己肯定感にもたらす影響について探っていきたい。

本論文では、「教師の肯定的な言葉かけが子どもの自己肯定感を有意に向上させるのではないか」を仮説とし、子どもの自己肯定感を高めることができる教師の有効的な言葉のかけ方を明らかにすることを目的とする。そこで、2章では自己肯定感が果たす役割について明らかにするために、先行研究から自己肯定感の定義づけと教師の言葉かけについて探る。3章ではアンケート調査の分析方法について述べる。4章では子どもの自己肯定感や教師との関わりと、教師の言葉かけの関連性を調べるために、アンケートの分析を行う。さらに、学校現場での事例を用いて教師の言葉かけの実践について明らかにする。この論文を通して、子どもの自己肯定感を育むための言葉かけの役割と影響について明らかにし、教師としての子どもへの効果的な言葉かけを明らかにしていきたい。

第二章 教師の言葉かけと自己肯定感

第一節 教師の言葉かけとは

吉川ら(2007)は教師を目指す大学生を対象とした質問紙調査から、子どもの学習意欲に影響を与える言葉かけについて明らかにした(9)。さらに、「言葉の意味を決めるのは受け手である」という認識を持ち、子どもに悪影響をもたらす言葉かけを行わないためには相手の情報を十分に集め、相手の話を聴くことが大切であると述べた。矢澤久史(2007)は言葉かけと子どものやる気と認知に及ぼす影響についてまとめ、「文脈に基づいて言葉かけの効果を理解していくことが重要となる」と結論付けている(10)。また、吉田道雄ら(1987)は学習意欲に影響を及ぼす要因について、教師と児童の間に認知のずれが存在することを明らかにし、教師はその認知のずれを踏まえて行動していくことが大切であると述べている(11)。これら3者の主張に共通するのは教師の自らの発言に対するメタ認知の重要性であると考ええる。教師が言葉かけを行う際に重要なことは、相手の子どものことをよく知り、自らの言葉がもたらす影響について十分理解しておかなければならない。

学習意欲に関する教師の言葉かけの調査はあるものの、自己肯定感に関する教師の言葉かけの調査は少ない。西口(2004)は問題場面において中学生は助言に類する言葉かけを求める傾向にあることを明らかにした(12)。安達ら(2000)は、教師の言葉かけにおいて成功場面では賞賛の言葉かけが、失敗場面では安心感を与える言葉かけが有効であることを明らかにした(13)。また、上野三千代ら(2000)は、児童の学校適応感と教師の言葉かけの間に相関があり、「教師が児童の努力や意欲を十分に認め励ますような言葉かけを意識的にすることは、児童の意欲をさらに高めるために効果的である。」と述べた(14)。教師の言葉かけは学習面だけではなく、学校生活面でも重要であると考えられる。

第二節 自己肯定感とは

高垣忠一郎(2004)は、自己肯定感は「自分が自分であって大丈夫」という感覚であり、自己肯定感とは「競争的自己肯定感」と「共感的自己肯定感」に区分されると述べた(15)。さらに、「競争的自己肯定感」とは競争に勝ち、他人よりも優れていることで満たされる自己肯定感であり、「共感的自己肯定感」とは自己が世界に二つとない、かけがえのない人生を生きているということに基づき、他者と共感しあえる自己肯定感であると述べた。本論文でも高垣(2004)にならい、自己肯定感を「自分が自分であって大丈夫」だという感覚とする。

内閣府は『平成26年度版子ども・若者白書』の中で、日本の若者は諸外国と比べて自己を肯定的に捉えている者の割合が低く、自分に誇りを持っている者の割合も低いと述べている(16)。また、文科省は2016年10月20日に「我が国の子供の意識に関するタスクフォース会議」の中

で日本の子どもたちの自己肯定感の低さについて取り上げ、その改善のための環境づくりについて議論された。その中で子どもの自己肯定感が低く、自信がないままではグローバル対応や主体的な学びの実現は容易ではないと述べられた。諸富(2000)は、学校での子どもたちの荒れや暴力の増加の背景として自己肯定感の著しい低下を挙げた(17)。竹田ら(2004)は、自己肯定感が低い子どもは学校生活での不安が大きいことを明らかにした(18)。このように、自己肯定感が低い子どもは教育効果が減少し、学校生活に悪影響を及ぼすことが考えられる。

細田絢ら(2009)は、中学生にとって学校は評価されるという不安が高まる場であり、その評価によって自己肯定感が影響を受けやすいと述べ、なかでも教師から賞賛や理解を得られるか否かが、子どもの自己肯定感に大きな影響を与えると述べた(19)。さらに小平幸春(2003)は小・中・高校生 9350 人を対象に褒められコトバと自己肯定感の相関について調査し、褒められる言葉かけられた子どもは自己肯定感が高い傾向にあることを明らかにした(20)。この両者の研究から子どもの自己肯定感を高める上での教師の肯定的な言葉かけが重要であると予想する。

久芳美恵子ら(2005)は、中学生を取り巻く人間関係全般から自己肯定感を取り扱い、自己肯定感が高いことで人とのかかわりが良好になり、それゆえに自己肯定感が高くなると結論を述べた(21)。さらに本田優子ら(2012)は、久芳ら(2005)の先行研究をもとに、教師とのかかわりを中心として子どもの自己肯定感を調査し、身近な先生が存在することが自己肯定感を高めることに關して重要になると結論を述べている(22)。

生徒の自己肯定感を高めるうえで、周囲の大人の果たす役割は大きい。一日の生活のほとんどを学校で過ごす子どもにとって、身近な大人はやはり教師であり、教師の果たす役割もまた大きいと考える。また、子どもの成長に自己肯定感が重要であることに異論はないだろう。教師は、子どもが「自分が自分であって大丈夫」だという感覚を育てられるような、働きかけを行わなければならない。そこで教師の子どもへの働きかけのうち、言葉かけに注目する。

第三章 研究の方法

それでは教師からの、ほめられ経験を持つ生徒とそうでない生徒の間には、自己肯定感の差異がみられるのだろうか。また、教師の言葉かけにはどのような特徴が見られるのだろうか。本研究では、アンケート調査を中心にこの問題を考えていきたい。調査の概要は以下の通りである。

【調査時期】 2016 年 11 月下旬

【調査対象】 京都府内の公立中学校 2 年生 149 名

【調査方法】 自記式質問紙

表 1 分析対象者

	配布数	有効回答数	有効回答率
男子	80	73	91%
女子	69	62	90%

【倫理的配慮】今回の調査では調査目的及び協力依頼を質問紙の表紙に記載し、調査対象者に同意を求め、質問紙への回答をもって同意とみなした。また、質問紙は、調査対象者が特定されないよう無記名とし、性別のみの記入とした。

【調査内容】本アンケートは、中学校における教師の言葉かけと生徒の自己肯定感の影響を調査するものである。中学生の自己肯定感についての質問項目は、久芳ら(2005)が作成した自己評価尺度 8 項目のうち 4 項目を抜粋して使用した(23)。久芳ら(2005)の自己評価尺度は生徒自身に対するポジティブな評価、捉え方であり、本研究においてもこれを自己肯定感と捉えた。中学生の教師とのかかわりについての質問項目は、久芳ら(2005)が作成した教師とのかかわり尺度 8 項目のうちから 6 項目抜粋して使用した(24)。自由記述欄では生徒のこれまでの学校生活の中で、教師からかけられてうれしかった言葉とその状況について調査した。アンケートの内容はページ数に限りがあるため、結果と共に記載する。アンケートの選択肢は記述式を除き「よく当てはまる、少し当てはまる、あまり当てはまらない、全く当てはまらない」の 4 件法を使用した。

【統計処理】自己肯定感、教師との関わりの各個人の得点について単純集計を行い、全体および男女別に各得点の平均を求めた。平均値の差の検定は t 検定を用いた。また、それぞれの質問で因子分析を行った。統計処理には Excel 統計 2013、SPSS を使い、5%の危険率で有意差を求めた。

第四章 アンケート調査の結果と考察

第一節 アンケート内容および結果

第一項 生徒の自己肯定感

教師の言葉かけと生徒の自己肯定感に関するアンケートの自分自身に関する質問において、主

表 2 自己肯定感の因子分析

	因子	共通性
自分には良いところがある。	.784	.615
自分には自分らしさというものがある	.737	.488
自分には誰にも負けないもの(こと)がある	.698	.543
今の自分が好きだ	.671	.450
固有値	2.095	2.095
寄与率(%)	52.375	

因子抽出法: 主因子法

因子法による因子分析を行った結果、4 項目 1 因子が抽出された(表 2)。久芳ら(2005)の調査(25)と同様に自己評価尺度が 1 因子であることが確認され、自らを受け入れる肯定的なものであることから、これを自己肯定感と捉えることにした。

さらに、男子と女子の自己肯定感得点の差が統計的に優位かを確かめるために、有意水準 5%で両側検定の t 検定を行ったところ、 $t(128)=0.46$, $p=.64$

であり、女子と男子の自己肯定感得点の差に有意差は見られなかった(表 3)。久芳ら(2005)の調

表 3 男女の自己肯定感の差

	全体	男子	女子
n	135	73	62
平均	10.969	11.368	10.525
標準偏差	2.721	2.603	2.802

査では女子よりも男子の方が自分自身のことを肯定的に捉えていると述べられているが、今回の調査では女子と男子の自己肯定感の差は見つからなかった。

表 4 自己肯定感の質問項目

質問事項	よく当てはまる	少し当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
自分には良いところがある。	18.05%(24)	46.62%(62)	28.57%(38)	6.77%(9)
自分には誰にも負けないもの(こと)がある	23.13%(31)	38.81%(52)	30.60%(41)	7.46%(10)
自分には自分らしさというものがある	32.09%(43)	44.78%(60)	19.40%(26)	3.73%(5)
今の自分が好きだ	9.09%(12)	37.12%(49)	38.64%(51)	15.15%(20)

それぞれの質

問事項に注目すると、「自分には良いところがある」、「自分には誰にも負けないもの(こと)があ

る」、「自分には自分らしさというものがある」では肯定的な回答がいずれも 6 割を超えた。一方、「今の自分が好きだ」という質問では、否定的な回答が半数を占め、全く当てはまらないと回答した割合が 15%を占めた(表 4)。

第二項 教師とのかかわり

教師の言葉かけと生徒の自己肯定感に関するアンケートの先生とのかかわりに関する質問にお

表 5 先生とのかかわりの質問項目

質問項目	接近	非接近	共通性
わからない事は質問する	.795	-.007	.648
先生とはよく話をする方だ	.782	-.190	.420
悩みや不安を聞いてもらうことがある	.591	.268	.491
自分のことを話しにくい	-.569	.409	.696
敬語で話をする	-.085	.852	.632
先生の話は注意深く聞いている	.418	.722	.734
固有値	2.098	1.523	
寄与率(%)	34.965	25.384	

因子抽出法: 主成分分析

いて、主成分分析を行った結果、6 項目 2 因子が抽出された(表 5)。第 1 因子は「接近」、第 2 因子は「非接近」と命名した。「接近」因子は教師と距離を詰め、積極的にかかわる項目であることから、これを「教師とのかかわり」と捉

えることにした。

さらに、教師とのかかわり項目において、男子と女子の得点の差が統計的に優位かを確かめる

表 6 男女の先生とのかかわりの差

	全体	接近得点 ⁽ⁱ⁾		非接近得点 ⁽ⁱⁱ⁾	
		男子	女子	男子	女子
n	135	73	62	73	62
平均	7.867	7.836	7.902	7.970	8.344
標準偏差	1.994	1.858	2.133	1.795	1.764

ために、それぞれ有意水準 5%で両側検定の t 検定を行ったところ、 $t(118)=-0.23$, $p=.82^{(i)}$, $t(123)=-1.18$, $p=.24^{(ii)}$ であり、接近得点、非接近得点ともに女子と男子の教

師との関わり経験の差に有意差は見られなかった(表 6)。

それぞれの質問項目に注目すると、「先生の話は注意深く聞いている」、「わからない事は質問

表 7 先生とのかかわりの質問項目

質問事項	よく当てはまる	少し当てはまる	あまり当てはまらない	全く当てはまらない
先生とはよく話をする方だ	24.81%(33)	38.35%(51)	27.82%(37)	9.02%(12)
悩みや不安を聞いてもらうことがある	9.02%(12)	24.06%(32)	41.35%(55)	25.56%(34)
自分のことを話しにくい	15.04%(20)	27.07%(36)	43.61%(58)	14.29%(19)
先生の話は注意深く聞いている	18.80%(25)	55.64%(74)	22.56%(30)	3.01%(4)
わからない事は質問する	25.56%(34)	40.60%(54)	28.57%(38)	5.26%(7)
敬語で話をする	44.09%(41)	44.09%(41)	0.00%(0)	11.83%(11)

する」、「敬語で話をする」では肯定的な回答がそれぞれ 6 割を超えている(表 6)。一方「悩みや不安を聞いてもらうことがある」、「自分のことを話しにくい」

では、否定的な回答がそれぞれ 6 割近くとなった(表 7)。教師との関わりでは個人的な関わりよりも授業面での関わることの方が多いのかもしれない。生徒は教師に悩みや不安を相談することが 3 割と、少ないことが分かった。内閣府の『平成 25 年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査』では、日本の若者の悩みや心配ごとの相談相手は母が 47.3%、近所の学校の友達が 38%、父が 20.7%、きょうだいが 17.5%であることを明らかにした(26)。子どもは教師ではなく、家族や友達に悩みや心配事を相談することが多いことが明らかである。

第三項 教師からの言葉かけ経験

図 1 は教師からの言葉かけ経験を持つ生徒のうち、自己肯定感と他者との関わりそれぞれ高得点群と低得点群に分類したものである。高得点群と低得点群の自己肯定感、高得点群と低得点群

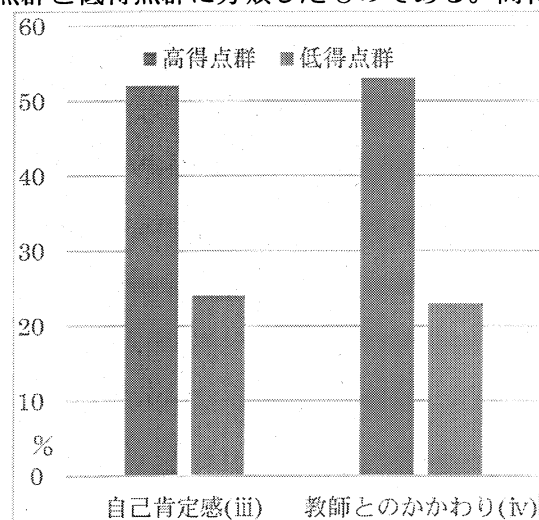


図 1

の教師とのかかわりの差が統計的に優位かを確かめるために、有意水準 5% で両側検定の t 検定を行ったところ $t(42)=-10.1$, $p=7.8E^{(iii)}$ 、 $t(52)=-13.3$, $p=2.32E^{(iv)}$ であり、低得点群と高得点群の自己肯定感の差に有意差は見られた。教師から肯定的な言葉をかけられた生徒は、自己肯定感が高い傾向にある。さらに、教師から肯定的な言葉をかけられた生徒は教師との関わり経験が高い傾向にある。

表 8 肯定的な言葉かけの分類

カテゴリー	件数	割合
人物評価	33	44.6%
事実の指摘	14	18.9%
感謝	11	14.9%
励まし	7	9.5%
予想・判断	2	2.7%
助言	2	2.7%
受容	2	2.7%
追い込み	2	2.7%
質問	1	1.4%
合計	74	100.0%

表 8 は吉川ら(2007)が国立大学学部生 83 名に対して先生から言われてやる気が出た言葉をカテゴリー化したものを一部改編し、今回の調査の回答に当てはめ、上位から並び替えたものである(27)。吉川ら(2007)が作成したカテゴリーは、学習意欲をもとにしたものであったが、教師と生徒の言葉のやり取りに注目して作られたものである。学習のみにかかわらず、学校生活の中で教師が発する言葉として対応させることができると考える。教師からかけられた言葉の中では「人物評価」に関するものが半数弱を占めた。「よくできている」や「頑張っている」など部活や授業など様々な場面で、生徒の言動や性格などを褒める言葉が挙げられていた。「事実の指摘」では「計算が早くなった」や「ノートをきれいにまとめている」など、授業面を中心にして挙げられていた。生徒は自分自身が頑張っていることを、教師がきちんと見てくれていると実感できることが嬉しく、より頑張ろうという意欲が向上するようである。「感謝」では、学校生活での何気ない教師の感謝の言葉が生徒にとって嬉しく、印象深いようである。「励まし」では「この調子で勉強頑張れ」や「テスト前にもうひといき頑張れ」など、勉強面において教師が意図をもって生徒を励ました言葉が挙げられた。「助言」では勉強のアドバイスだけでなく、生徒が抱えている不安に対してのアドバイスも挙げられていた。「受容」では「何かあったら相談にのるからいつでもいいや」や「〇〇さんには〇〇さんの良さがある」など、生徒が教師に相談したときに受け入れてもらえるような言葉が挙げられていた。「追い込み」では「テストの目標に向けて頑張れや」というように、何らかの目標や期限に向けて、達成するように促す言葉が挙げられていた。「質問」では、「今回のテストでは頑張ったんちゃう？」と、生徒の頑張りを問いかける言葉が挙げられていた。

表 9 肯定的な言葉かけの場面

場面	件数	割合
テスト	17	25.0%
授業	12	17.6%
部活	13	19.1%
学校生活	18	26.5%
行事	4	5.9%
二者面談	3	4.4%
その他	1	1.5%
合計	68	100.0%

表 9 は今回の調査の回答を場面ごとに分類したものである。テストや授業など勉強面では、合計で 42.6%である。部活や学校生活など、学校生活面では 45.6%である。場面ごとに分類すると、勉強面と学校生活面はほぼ同じ割合となった。場面ごとの分類に注目すると、生徒の印象に残っているのは二者面談や行事など特別な場面ではなく、何気ない日常の中での一言が多いようである。

第二節 実習中の事例

第一項「人物評価」、「学校生活」の事例 Aさん 中学生女子

比較のおとなしめな女の子。数学の補習授業終わりの階段で見かけ、「勉強頑張ってるな」と声をかける。

この事例では言葉かけがうまくいったものである。アンケートの自由記述欄に記載されていた事例であるが、この時の出来事を筆者は忘れてしまっており、何気なくかけた言葉がこの生徒に覚えてもらっていることに驚いた。意図せずかけた言葉が、生徒の印象に残った事例である。この言葉かけ以降、A生徒は数学の補習授業で熱心に取り組み、実習中に良好な関係を築くことができた。この事例のデータでは自己肯定感、教師とのかかわり経験ともに高得点群に属している。このデータのみでは、言葉かけを行ったことが生徒の自己肯定感を高めたとは言えない。しかし、意図していない言葉かけにしる、生徒の印象に肯定的な言葉かけが残っていることは確かだろう。この事例では相手の生徒のことを十分に知り、授業中での様子や普段の生活での様子を把握しており、人間関係が十分に築くことができていた。相手の頑張りをよく知っていたからこそかけることができた言葉である。

第二項「質問」、「学校生活」の事例 B君 中学生男子

二学期から近隣中学校から転入。少し荒れ気味であった。机に一人で眠そうに座しているとところを見かけ、話しかける。「どしたん？眠いん？」と話しかけたものの返事はなかった。「体調悪いんか？」と再度話しかけたあと、しばらくの沈黙の後「うざい」、「教室の前に行っとけ」と返事があった。

この事例では決定的に言葉のかけ方を間違えたものである。今回の事例では自己肯定感を上げる以前に、生徒との人間関係がこじれる原因の言葉かけとなっている。この事例の反省点は、この生徒の事情を詳しく事前調査することもせずに、話しかけたことである。クラスに馴染めていない生徒とかかわる場合であれば、より慎重にならなければならなかった。それも相手の事情を考慮せずに詰問調になってしまっている。今回のような場合ではなるべく気軽に相手が応えられるような会話から始める必要がある。質問としても端的に短く行うのがよいだろう。この言葉かけ以降、こじれた人間関係を何とか回復するために挨拶から始め、実習終盤では挨拶が返ってくるようにはなった。中山勘次郎ら(2007)は「学校生活への意欲が低く教師との接触自体を快く思っていない生徒に対しては、できるだけ短くシンプルな言葉を使って注意内容を伝えられるよう、説明する言葉を吟味していく必要性が示唆される」と述べている(28)。中山ら(2007)は教師の注意する言葉についてまとめたものだが、今回の事例のように「質問」する言葉かけでも同様のことが言えるだろう。質問する内容についてはもちろんのこと、子どもの状況や感情に十分に

配慮したうえで子どもと関わっていくことが求められる。

第三節 アンケート結果の総合考察

今回の調査では次の3つのことが明らかになった。

- ① 子どもは悩みや相談相手として教師を選択した割合が少ないこと。
- ② 教師から肯定的な言葉をかけられた子どもは、自己肯定感が高く、教師とのかかわりが多い傾向にあるということ。
- ③ 子どもの自己肯定感を高める言葉かけを行う上で大切なことは、相手をしっかりとよく見て、受け止め、飾らないことばでそのままに相手を褒め、ねぎらうこと。

今回の調査では自己肯定感、教師との関わり経験において男女の有意差は見つけられなかった。研究協力校の対象学年は男女の壁が少なく、また、休み時間でも教師が積極的に生徒とかかわっていることがその理由として考える。また、生徒は教師に悩み事を相談すると答えた割合が3割と少ないことが明らかになった。様々な調査からでも明らかになっているように、生徒は相談相手として家族や友人が多く、教師は少ないことが本研究でも裏付けされた。

教師から肯定的な言葉をかけられた生徒は、自己肯定感が高く教師との関わり経験が高い傾向が明らかになった。成澤弘明ら(2011)は自己肯定感を獲得するには分かり合える同年代の他者の存在に加えて、受容的な大人の存在を挙げていた(29)。教師が肯定的な言葉をかけることによって、生徒は「自分が自分であって大丈夫」だという感覚を育むことができるのだと考える。また、教師のかけた言葉では、悩みや相談に乗った時の言葉かけよりも、普段何気なく過ごしている時に発せられた言葉の方が生徒の印象に残っているようである。何気ない感謝の言葉、何気ない生徒をねぎらう言葉が生徒の自己肯定感を高めることに繋がっている。竹田ら(2004)は、「教師は子どもたちをよく観察し、努力したことをすかさず褒め、一歩出たことを励ましたことが効果として自己肯定感を高める。」と述べている(30)。このことは、表7の人物評価、事実の指摘、励ましの合計が73%となっていることから明らかであろう。また、表8の学校における場面において、教育相談など特別な場面における言葉かけでなく、授業や部活動、休み時間など毎日繰り返し行われる場面での教師の言葉かけが多いことから明らかであろう。子どもの頑張った内容をそのままに褒め、注意深く子どもの様子を見つめていくことが、子どもの自己肯定感を高めるうえで大切なのではないだろうか。

さらに事例研究から、相手の感情や状況という情報を集め、相手の頑張ったことを即座に、言葉をかけることの大切さが明らかとなった。これは吉川ら(2007)の主張する、言葉かけにおいて

相手の情報を集め相手のことをよく聴くことが大切であるということの裏付けとなった(31)。また、特定の場面における言葉かけではなく、これまでの人間関係を踏まえた言葉かけが大切であると考え。相手のことを考え、子どもの様子を常に観察し、子どもの頑張りを見逃さないことが大切である。子どもの自己肯定感を高める言葉かけを行う上で大切なことは、相手をしっかりとよく見て、受け止め、飾らないことばでそのままに相手を褒め、ねぎらうことであると考え

第五章 おわりに

今回の調査から、教師から肯定的な言葉かけをされた経験を持つ子どもは、自己肯定感が高く、教師とのかかわりが多いことが明らかとなった。本研究の「教師の肯定的な言葉かけが子どもの自己肯定感を有意に向上させるのではないか」という仮説が立証される結果となった。子どもの自己肯定感を高める要因としては様々なものが考えられるが、その要因の一つとして教師の肯定的な言葉かけは有用であろう。言葉のかけ方として、必ずしも特別な場面である必要はなく、毎日の学校生活の中でしっかりと子どもを見つめ、必要な時に必要な言葉かけを行うのが大切である。機を逃さないためにも子どもがどういうことに取り組み、頑張っているか把握していくことが大切である。

本研究の今後の課題として2つ挙げる。1つ目はデータの妥当性である。本研究のデータは中学校1校のみから得られたものである。また、本研究の調査を行った時期がテスト後、二者面談後であったこともあり、得られた情報に偏りがあることは否定することができない。

2つ目は子どもの自己肯定感の変化のプロセスである。今回の調査では子どものこれまでの経験の中で印象に残っている肯定的な言葉を取り上げたが、肯定的な言葉をかけたことにより自己肯定感がこれからどのように変化するかは明らかにすることができなかった。教師から肯定的な言葉をかけられた生徒は自己肯定感が高く、教師との関わり経験が高いという本研究の結果が普遍的なものであるかどうかについては、今後も研究していく必要がある。また、本研究では肯定的な言葉をかけられた生徒を調査の主体としたが、否定的な言葉をかけられた生徒と自己肯定感との関わりは明らかにすることができなかった。今回の研究では言語化された教師の発言を対象に調査を行い、生徒の自己肯定感との関わりを明らかにした。しかし、生徒の自己肯定感と教師の非言語的な行動の関連は十二分に考えられる。今後の教師生活の中で生徒の自己肯定感を育むための具体的な手立てを追及していきたい。

参考・引用文献

- (1)内閣府 (2014) 「平成 26 年度版子ども・若者白書」
- (2)諸富祥彦 (2000) 「“自分を粗末に扱っていると落ちつく” 子どもたち—学校カウンセリングの見地から—」『教育学研究第 67 巻第 1 号』 日本教育学会 70-71
- (3)竹田レイ子、荒木紀幸 (2004) 「学校における児童の自尊感情高揚のための教師の支援」『日本教育心理学会総会発表論文集』 日本教育心理学会 132
- (4)松井賢二、鈴木健二 (2002) 「高校生の学校適応と進路 (キャリア) 成熟、自己肯定感との関係」『教育実践総合研究』 新潟大学 91-102
- (5)吉川正剛、三宮真智子 (2007) 「生徒の学習意欲に及ぼす教師の言葉かけの影響」『鳴門教育大学情報教育ジャーナル』 鳴門教育大学 19-27
- (6)宮田一仁 (2008) 「児童の意欲を高めるための教師支援の在り方」『平成 20 年度高知県教育公務員長期研究生研究報告書』 高知県教育委員会事務局教育センター 1-8
- (7)西口利文 (2007) 「問題場面で中学生が教師に求める言葉かけ」『日本心理学会第 71 回大会発表論文集』 日本心理学会
- (8)安達紀子、上野三千代、河野久美子、芳賀明子 (2000) 「教師の言葉かけと児童の感じ方の関連Ⅰ—場面ごとの児童がうれしいと感じる教師の言葉かけ—」『日本教育心理学会総会発表論文集』 60
- (9)吉川正剛、三宮真智子 (2007) 前掲 19-27
- (10)矢澤久史 (2007) 「指導者の言葉かけが子どものやる気と認知に及ぼす影響」『東海学院大学紀要 1』 東海学院大学 211-217
- (11)吉田道雄、山下一郎 (1987) 「児童・生徒の学習意欲に影響をおよぼす要因と現職教師の認知」『教育心理学研究第 35 巻第 4 号』 日本教育心理学会 29-37
- (12)西口利文 (2007) 前掲書
- (13)安達紀子、上野三千代、河野久美子、芳賀明子 (2000) 前掲書 60
- (14)上野三千代、安達紀子、河野久美子、芳賀明子 (2000) 「教師の言葉かけと児童の感じ方の関連Ⅱ—児童の学校適応感とうれしいと感じる教師の言葉かけの相関関係—」『日本教育心理学会総会発表論文集』 61
- (15)高垣忠一郎 (2004) 『生きることと自己肯定感』 新日本出版社 206-212
- (16)内閣府 (2014) 前掲書
- (17)諸富祥彦 (2000) 前掲書 70-71
- (18)竹田レイ子、荒木紀幸 (2004) 前掲書 132
- (19)細田絢、田嶋誠一 (2009) 「中学生におけるソーシャルサポートと自他への肯定感に関する研究」『教育心理学研究第 57 巻第 3 号』 教育心理学会 309-323
- (20)小平幸春 (2003) 「果たしてオトナの賞賛は子どもの自己肯定感情を高めるのか 小・中・高校生調査(9350 人)に見るオトナの態度表明の重要性和問いかけの課題」『日本教育心理学会総会発表論文集』 日本教育心理学会 239
- (21)久芳美恵子、齊藤真沙美、小林正幸 (2005) 「中学生の自己肯定感と人のかかわりとの関連について」『東京女子体育大学紀要』 東京女子体育大学 19-28
- (22)本田優子、荒嶽木綿美、藤林まど花、一期崎直美 (2012) 「中学生の自己肯定感と教師への信頼感および関わり経験との関連」『熊本大学教育学部紀要自然科学 61』 熊本大学 75-84
- (23)久芳美恵子、齊藤真沙美、小林正幸 (2005) 前掲書 21
- (24)久芳美恵子、齊藤真沙美、小林正幸 (2005) 前掲書 21
- (25)久芳美恵子、齊藤真沙美、小林正幸 (2005) 前掲書 20-21
- (26)内閣府 (2013) 「平成 25 年度我が国と諸外国の若者の意識に関する調査」
- (27)吉川正剛、三宮真智子 (2007) 前掲書 22
- (28)中山勘次郎、三鍋由貴恵 (2007) 「教師の＜注意言葉＞に対する中学生の受けとめ方」『上越教育大学研究紀要第 26 巻』 上越大学 367-379
- (29)成澤弘明、添田祥史 (2011) 「自己肯定感の獲得プロセスに関する一考察：冬月荘「Z っと！Scrum」を事例に」『北海道教育大学紀要教育科学編』 北海道教育大学 49-60
- (30)竹田レイ子、荒木紀幸 (2004) 前掲書 132
- (31)吉川正剛、三宮真智子 (2007) 前掲書 19-27